

「赤い薔薇はただの雑草」

鹿児島純心女子高等学校

笹木　麻帆

表紙

好きになった人には、他に好きな人がいた。なんて、よくある話だ。この世には無数の人間がいて、男と女が出会って、愛して愛されて、憎んで憎まれて。最後はみんな死んでいく。だから、俺が今失恋したことなんて、何でもない。世界を見渡せば、どこにでもある普通のこと。

「ごめんなさい。他に好きな人がいるの。」

俺の告白を断った時の彼女の顔は、申し訳なさそうで、少し困ったようで、好きな人を思い出していたのか、頬が少しピンク色に染まっていた。

「そっか。」

胸に小さなヒビが入った気がした。けれど、俺はなんてことない顔をしてごめん、それじゃあねと言って彼女の横を通り過ぎた。

俺はいつ彼女のことを好きになったんだっけ。ああ、そうだ。たしか、桜が散り始めた頃。帰り道、たまたま公園の前を通りかかったあの日。転んだ子供に絆創膏を貼って優しく頭を撫でていた彼女を見て、見ず知らずの子供にも手を差し伸べることができる人なんだと胸が温かくなった。気づけば、彼女を目で追っていた。同じ学校、同じクラスで、特別仲が良いわけではなかったが、顔を合わせれば言葉を交わすくらいの仲ではあった。学校でも彼女は変わらなかった。廊下や教室の床にゴミが落ちていたら何気なく拾うし、クラスでひとりぼっちの子にも自然と話しかける。誰かが褒めてくれるわけでもないのに、彼女はそうしている。おそらく、それが彼女にとっての当たり前なのだろう。彼女のことを知れば知るほど、この想いは強くなっていく。そして、今日。思い切って告白した。だが、結果は見事な失恋だ。半年ほど彼女のことを想っていた男子高校生の恋は、「ごめんなさい」の一言で呆気なく散った。それから、彼女が想い人と付き合い始めたという噂を耳にした。俺が失恋して一週間後のことだった。驚きはしなかった。そうなるだろうと予想していたから。だって、彼女には好きな人がいて、彼女自身もとても素敵な人だから。それなのに、なぜ俺は今こんなに苦しんでいるのだろう。もし、彼女の隣が俺だったら。そんな妄想が一瞬頭をよぎったが、すぐに打ち消した。失恋した俺の出る幕はもはや存在しない。彼女が幸せならそれでいい。そう思える人間でありたかった。

告白して振られた人間と振った人間は、一般的に気まずくなるのだろう。俺も気まずい。だが、彼女はまるで何事もなかったかのように今まで通りに接してきた。

「おはよう」「さっきの授業眠かった〜」「お腹空いた、早くお昼にならないかな」

俺にとっては一世一代の告白だったが、彼女にとっては少し親しいクラスメイトが告白してきただけなのだろう。彼女が今まで通りに接してくれることに対して嬉しく思うが、俺の想いを踏み躙られたように感じるのは何故だろう。彼女にとって、俺は道端の雑草に紛れて咲

いている小さな花のように、目に留まることもあれば気づかず踏んで歩くこともある。それだけの存在なのだろうか。ポツンポツンと心に黒い何かが溜まっていくような感覚に時々胸がひどく苦しくなる。もちろん、彼女はそんなことを知る由もなく、今日も俺に話しかける。

「次移動教室だよ、起きて」

「ん？ああ、ありがとう」

また一つ、心に黒い何かが溜まった気がしたが、俺は見ないふりをした。

「お前、なんかめっちゃ血管浮き出てない？大丈夫？」

友達にそう指摘されて自分の腕を見てみると、たしかに血管が浮き出ているように見えた。

「うわっ本当だ。まあ、でも今日はそういう日なんじゃね？別に何も痛くも痒くもないし」

「そうか？ならいいけど」

その後はいつも通り特に面白いことがあるわけでもない、まだ少し失恋の痛みが残る日を過ごしていた。ある日の昼休み。彼女が教室の前で恋人と話す姿を見た。彼女はとても楽しそうに笑っている。俺が惚れた、あの笑顔で。ポツン、ポツン。また、心に黒い何かが溜まっていく。失恋したくせにまだ彼女のことが好きで。でも彼女には恋人がいて。自分とは結ばれないならせめて彼女の幸せを願おう。そう、思っていたのに。彼女の恋人に嫉妬した。彼女の幸せを願えなかった。でもそれ以上に、誰かに嫉妬して羨み憎む行為をしている自分を今この瞬間、この世で一番最低に思う。なんて醜いのだろう。嫉妬と、憎しみと、少しの自己嫌悪。失恋した後、ときどき心に溜まる黒い何かは、きっとそれだ。

「俺、最低だ……」

吐いた言葉は誰の耳にも拾われることなく、静かに空虚に解けて消えた。

ある日、右手の薬指に棘が刺さっていた。どこかで刺さったのだろう。全く痛みを感じなかったので驚いた。危ないからすぐに抜こうと引っ張ってみる。すると、なぜか痛みが生じた。ささくれを剥いた時のような痛みだ。そんなに良くない位置に刺さってしまったのだろうか。無理に抜こうとすると余計に危ないかもしれない。今はそっとしておくことにした。そのうち、勝手に抜けたのだろうか。棘はいつの間にか薬指から消えていた。またある日、手の甲に細い線が浮かんでいた。また血管が浮き出ているのだろう、今日はそういう日だ。そう思っていたが、しばらくしてふと手の甲を見ると、先ほどの細い線は緑色に変化していた。そしてそれはいつの間にか手首にまで広がっていた。さすがにおかしいと思い、保健室へ行った。が、

「何もないわね」

その頃には緑色の細い線は消えていた。またある日、朝起きるとベッドに赤い花びらが落ちていた。俺が寝てる間に妹が悪戯したのだろうかと思って呆れながら頭を掻くと、ひらりひ

らりと赤い花びらが落ちてきた。これにはさすがに驚き、慌てて母さんに相談したら「あんた何寝ぼけてんの？髪は黒いし、ベッドに赤い花びらなんて落ちてないじゃない」と言われた。妹に聞いても「私知らな～い。あ、その卵焼き一つちょうだい」と、本当に知らないようだった。今、自分の体に何が起きているのだろう。ネットで調べてもそれらしいことは何も出てこない。不安と恐怖の渦が自分を溺れさせようとしてくる。そんな中でも、学校はあるから行かなくてはならない。幸い今は秋だ。セーターを着ている人は数人いるし、早い人はブレザーを着ている。だから、俺がセーターを着ていても何の違和感もない。友達も「あ、こいつも寒くなってきたんだな」くらいの認識だろう。これで腕に浮き出る緑色の細い線は隠せる。手の甲の線は、まあ、その時に何とかする。指の棘も小さいからよく見ないと気づけないだろう。髪はあの朝以来何も起きていないから、今のところは大丈夫だろう。異変は、少しずつ俺の体を蝕んでいった。

「最近セーター着てるね、寒いの？」
「ん、まあな」
「そっか、風邪ひかないようにね」
「ありがとう」

彼女は今日も俺に話しかけてくれる。会話の最中に笑顔を見せることもある。その笑顔を見るたびに、彼女の隣に立てないことを実感し、また心に黒い何かが溜まっていく。どうしようもないことをどうにかしようとするなんて無理だ。もし、これが舞台の上ならば、自分は脇役にすらなれないただのモブだろう。序盤でヒロインに告白して振られるだけの役。最後まで舞台に立っているのは幸せになったヒロインと主人公だけ。苦しい。いっそ、幸せなヒロインと主人公を壊して悪役にでもなれたら。ズキッと腕が痛む。まさか、と思い袖を捲ると、緑色の細い線が少しずつ腕に広がっていた。こんなもの、誰かに見られたらまずい。すぐに袖をおろして隠す。もう、見ないふりはできない。俺のような人間は、舞台から降りるとまるでそこには何もなかったかのように、やがて人々から忘れられていくのだろうか。ズキッズキッ。また、緑色の細い線が広がった。

緑色の細い線は毎日少しずつ体に広がっていった。指の棘も少しずつ大きく鋭くなっていった。授業中、机に赤い花びらが落ちていることが増えた。俺は、そんな自分の体に起きた異変を隠すため、学校を休むようになった。家でも家族と会わず、ずっと部屋に閉じこもっている。家族はそんな俺を心配してくれているみたいだが、そっとしておいてくれている。その心遣いに胸が温まる。朝起きると毎朝ベッドに赤い花びらが落ちている。緑色の細い線は首筋や太ももにまで広がった。棘も、手の指だけでなく足の指にまで生えてきた。自分が自分ではなくなっていくような感覚に毎日めまいがした。

「ご飯、ドアの前に置いておくからね」
母さんが食事を持ってきてくれたらしい。
「ありがとう、母さん」
でもごめん。もうこの体は人間の食事を受け付けていないらしい。今欲しいのは、水と日光だけ。今日は雨が降っているから、水で今日を生き延びるしかない。日に日に人間離れしていく体。俺が人間でいられる時間は、もう残りわずかだろう。でも、人間でいられる間に、どうしてもやりたいことがある。彼女に会いたい。一度でいいから、最期に会いたい。たとえ彼女が今の俺の姿を見て拒んだとしても、それでいい。馬鹿にされても構わない。いっそ拒んでくれ、罵ってくれ。彼女に会いたいという想いだけを胸に、俺は家族に見つからないよう家を出て、雨が降る街を走り出した。

「はっ、はっ」
息が苦しい。久しぶりに運動したからか。日頃の運動不足がここで出た。それとも、俺の体が人間でなくなってきたからか。それでも、彼女に会いたいという思いだけは変わらない。
走れ、走れ。
たとえ腕や足から葉が生えてきても。
走れ、走れ。
たとえ足の指の棘が靴を貫通させようとも。
走れ、走れ。
たとえ頭から赤い花びらが落ちてこようとも。
走れ、走れ。
もう一度、彼女に会うために。ただひたすら、前を向いて走れ。そうして辿り着いたのは、彼女に惚れたあの公園だった。公園には誰もいなかった。当然だ。雨も降っているし、まだ学校が終わる時間でもない。終わるまで待っていよう。そう思い、公園のベンチに座ろうとしたら突然体から力が抜けた。緑の葉は青々と茂り、赤い花びらはひらひらと舞う。視界がどんどんぼやけていく。だめだ、嫌だ。まだ、彼女に会えていないのに。助けを呼ぼうにも声が出せない。腕や足を動かそうとしても体が言うことを聞かない。こんなところで、俺の人生は終わるのか。後悔と彼女への恋慕を胸に、俺は眠気に抗えずゆっくり目を閉じた。

雨上がりの匂いが好きだ。世界に溜まった汚いものが洗い流され、視界がクリアになり、世界が新しく生まれ変わったと、綺麗になったように錯覚させてくれるから。だから、雨上がりにはよく散歩してた。今公園に入ってきたあの親子もそうなのだろうか。親子はこちらに向かって歩いてきた。
「ママ、綺麗な花が咲いてるよ！」

「あら、本当ね」
「これ、なんていう花？」
「これはね、薔薇って言うのよ。真っ赤で綺麗ね」
「うん！」
そうか、俺は今赤い薔薇になっているのか。なぜ、赤い薔薇なのだろう。それは、彼女を好いた気持ちからだろうか。それとも、彼女の恋人を憎んだ気持ちからだろうか。あるいは、愛して憎み、自己嫌悪に陥った俺自身の気持ちだろうか。もう俺は人間に戻れないのだろうか。願うなら、彼女にもう一度だけ会いたかった。

この世には無数の人間がいて、恋をして、失恋する。俺もその一人だった。ただ一つ違ったのは、失恋した俺が人間のまま生きるのではなく、赤い薔薇として生きることになったことだ。どんなに美しく咲いても、彼女に見られなければ、そこら辺に生えている雑草と同じ。
「ねえ」
もし、彼女を追いかける足があれば。もし、彼女を抱きしめる腕があれば。もし、言葉を紡ぐ口があれば。俺は今、何を伝えただろう。